「広報しながわ」平成 19（2007）年８月１日号より転載
（イラスト：池原昭治）

品川（しながわ）昔（むかし）ばなし

安楽寺の「火中出現御影写」の供養塔

西五反田五丁目にある安楽寺は四百五十年ほど前に開かれた古いお寺です。このお寺には、江戸時代、庶民の間で広く行われた「庚申待」にちなんだ供養塔があります。その中のひとつ「火中出現御影写」の文字と、青面金剛像、邪鬼、日・月、鶏、二猿が刻まれた庚申供養塔には、こんなお話が伝えられています。

寛政十一年（1799）のことです。上大崎村にすむ農民、清次郎の家が火事になってしまいました。「大変だあ、清次郎の家から火がでたぞ」

近くにすむ農民たちは、いそいで清次郎の家にかけつけました。清次郎の家には、六十日ごとにめぐってくる「庚申待」で使う掛け軸があずけてありました。それには、大切な庚申様のご本尊である青面金剛が描かれていました。みんなで、水をかけていっしょうけんめいに火を消そうとしましたが、なかなか火は消えません。「ああ、大切な庚申様が焼けてしまう」。農民たちは、なんとか掛け軸だけでもはこび出そうとしましたが、火のいきおいが強くてどうすることもできません。そのとき、火の中から掛け軸が天高く舞い上がり、くらやみの空へと消えてしまいました。「おぉ～。庚申様が天に昇った」。そのありさまを農民たちはなすすべもなく見つめていました。

それから三日後のこと。近くの大きな木のえだに、すすけた掛け軸が焼けずに引っかかっているのが見つかったのです。「庚申様が無事にお戻りになったぞ」。役人の高木喜左衛門は、この不思議なできごとを聞いて深く心を打たれ、掛け軸の青面金剛を、石に写しとり「火中出現御影写」と彫った供養塔を造りました。

谷山橋のそばにあった供養塔は、その後、川や道路の改修工事のため安楽寺に移されたということです。

【庚申待】

六十日ごとにくる「庚申」の夜、眠ると体から三尸という虫（鬼神）が出てきて、寿命を司る神にその人の悪事を報告するので、眠らずにいるというのが「庚申待」です。庚申様を祀った後、寝ずに過ごしてごちそうを食べるという習俗で、江戸時代に盛んに行われました。